

内子座



藝於遊

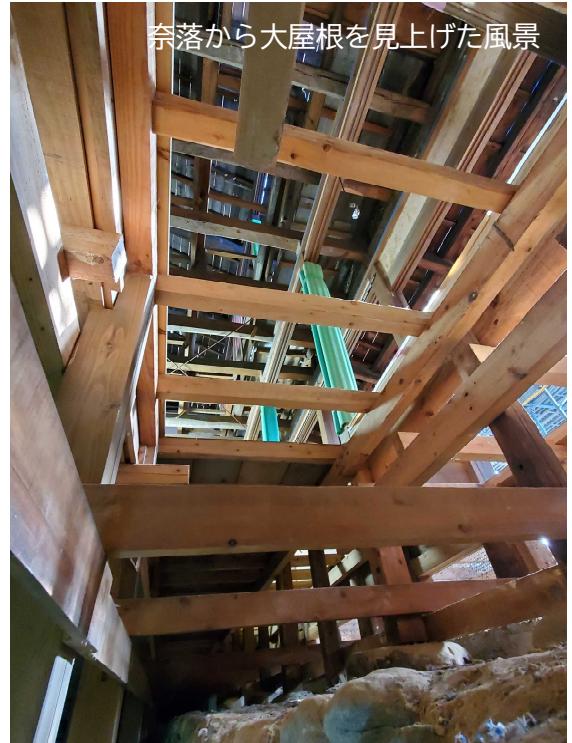


床板の解体③

前号に続き、今回も床板解体を通じて見えてきたこと、感じられることを掲載したいと思います。

内子座は、何度も繰り返しになりますが、大正5年に創建、昭和20年代に映画館に1階客席部分が改変され、昭和40年代に商工会館に1階東西棧敷席を中心に改造、昭和58年から60年にかけて復原改修工事が行われ、その後、平成5年と7年に活用のための改修が施されました。その後も活用上の軽微な改修は行われていますが、大きく形を変えたのは、上述のような時期になります。重要文化財に指定されたのは平成27年のこと。こうした改変の内容は、わかっているようでは隅々まではつかめていない。今回の保存修理工事では、こうした改変の様子もさぐりながら解体作業が進められています。なお、内子町では『内子座80の年輪』という書籍を発行していて、昭和の復原改修を中心に、内子座をとりまく歴史や人々の思いが掲載されています。興味のある方はぜひご一読ください。

さて、床板解体の話に戻りますが、これまでの修理履歴からもわかっているように、およそ1階部分は昭和に改修されていて、材も昭和のものがほとんどです。解体することで改めてそれらが確認できました。2階は、商工会時代も劇場空間として利用されていたこともあり、大正創建時の材が多く残されています。床板も、昭和の際にいったん解体されたものが、また使われていたりするものもあり、今回の保存修理工事と同じような作業が行われたいたのかと思うと、当時の風景が今と重なり、愛おしさが増してきます。



▲天井板と床板解体により、奈落から大屋根の野地板が見えるように。激レア風景！



▲昭和の復原改修時に復原されたすっぽんへの降口。現在のような奈落から鳥屋口へと地下に通路ができたのは、平成5年の改修時のこと。

◀①~⑤大正の床板材裏側に書かれていた墨文字。数量と思しき墨文字(①~③)のほかに、図形(④)や"内子座"(⑤)と記されたものも。"座"は旧字体で書かれている。昭和の復原改修時に記されたと思しき文字跡も発見(⑥)。当時もどこに使われていた床板か確認していたのでしょうか。